

別稿
特寄

原爆被爆下における
広島県医師会長・大原博夫先生の活動について

廿日市市本町 江川 義雄

本年は被爆より58年となる。その惨禍についての資料は無数に発行されている。千をもって数えてもなお充分でない。

本年7月「広島医学」にはヒロシマ日記と原爆乙女と題し、1955年の歴史的記述の中に1951年ノースカロライナ大学の外科医Warner Wells 博士が着任した。その書評はNew York Times, Saturday Review, News Week, Atlantic Monthly などに採り上げられ、ヒロシマ日記は14ヶ国語に翻訳され、また、昭和55年(1980年)に設立されたIPPNW(核戦争防止国際医師会議)活動が活発に行われている。つい最近県医師会では在外被爆者検診事業を実施したばかりである。

原爆症の遺伝学的研究は、昭和20年のあの時の惨禍は現在に至るも行われ、原爆症の恐ろしい影響力を失っていないし、人類の歴史から回顧すれば、その非人道的行使をすれば、「人間に未来はあるか」の設問となり、医の原点を模索する社会哲学的問題となる。どんな伝染病よりも怖く永続する魔のテーマについてこの膨大な

テーマ、項目の中から医療組織の代表者であった県医師会長、大原博夫先生の行動についてふれることにする。

大原 先生



本論文の主たる引用は、昭和46年3月26日発行の「大原博夫伝」の中の203頁に記された原爆当時の県医師会長についての座談会記録により、本書は広島県と県医師会の共著で、小生もその追想録編集委員会の委員の一人として参加して、先生の人間性についての認識を新たにしたもののである。

年譜に見られるように先生は豊田郡の生まれであり、父・弥八は政治面で活躍した医師であった。先生は県立広島中学卒業後、京都の三高に入学、二年終了して、東京の慈恵会医学専

門学校二学年に編入しているが、その経緯について三高出身者とも詮索したが判然としなかった。大正9年同専門学校卒業後、父の医業を継ぐことになり、同年町会議員に選出されている。若年にして開業、議員になっていく経歴は父の薫陶をうけ政治面への関心が深まり医業と政治面に活躍し、昭和13年には広島県会議員、昭和18年には県医師会長に選出されたのである。本項では先生の政治的業績は他の資料を参照して貰うこととし、医師会長の事績について述べることにする。その時代の医師会組織は現在と体制が異なり、軍政が優先し、県医師会は強権を持った県政下に属し、郡市医師会は支部別の活動もあり、戦時下で健康な男子医師も動員令のため、医療活動は弱体化していた。

大原先生は戦況の不良と大阪、呉の焼夷弾政画作戦は、敵は都市の周辺に投下し、市中の市民の被害が増大するのを懸念し、市民の疎開と医師の禁足令(防空業務従事令)を解くようにと幾度となく軍に要請したが受け入れられなかった。県は沖縄県庁の事例を引用して、今疎開すると県民は敗戦思想を助長するといひ、また市内在住の医師で疎開した者があれば、その報告書を提出するようにと再三要求されたが、大原先生はその申し出を拒否、無視し続けた。軍の禁足令の発動により、医師100余名が死亡されたことは全く悲惨であった。

昭和18年頃より、練兵場で防空救護の訓練ばかりで医師諸君のために役立つことはやって

いなかった。医師会を市内に置いては駄目だから、健康保険などの事務だけであるから医師会を連れて帰る決心をし、看板だけは専務理事の渡辺英吉造氏のところへ掛けておいて河内町へ帰った。広島が全滅したらしいことを知り、広島に出て東警察署に行くと言生課長が肋骨を3、4本折っていて、今、救護所を作っているから、あなたが代わりにやってくれないかと頼まれることになった。

三日目くらいからトラックに乗ってくれというので、それで廻ってくれという県庁に行くと笠坊君がひとりやって来ていた。そこで郡を二つに分け県医師会を招集してくれと言われて。皆出てきたが、薬も何もないので、包帯やピンセットもみんな手持ちで看護婦も連れてきて、交替に出たものである。よくみんな物を惜しまず持ってきた。郡部から来たお医者さん達は薬でも何でも手持ちでやって来て市内の被爆者を救護した。被爆者は郡部へも近い所へ皆逃げてきた。私も広島から帰ったら翌朝出るまでその人達をみていた。歯齦(しぎん)出血や鼻出血、血便などのひどい人がいて、どうしても止まらない。とっさのことで輸血してやったら、ころっと止まった。出血の止めようがないので、ヒントもないことであり、後に白血球が足りないことをみつけたのは23、4日であろうか。それから大阪、神戸に注射器を買いに行った。それはよいが血液がないので思うように輸血もできなかった。

大原博夫先生年譜

明治28年	3月15日	広島県豊田郡大河村大字川戸213屋敷 (現在広島県賀茂郡河内町大字1591番地) 医師大原弥八、長男として生まれる
明治34年(7歳)		川戸尋常小学校入学
明治41年(14歳)	3月	下戸野尋常高等小学校高等科3年終了
	4月	広島県立広島中学校第1学年入学
大正2年(19歳)	3月	県立広島中学校
	4月	京都第三高等学校入学
大正4年(21歳)	3月	京都第三高等学校第2学年終了
	4月	東京慈恵会医院医学専門学校予科2年編入入学
大正9年(26歳)	3月	東京慈恵会医院医学専門学校卒業
大正10年(27歳)		河内町議員に当選
大正11年(28歳)	1月15日	木村トシと結婚
昭和13年(44歳)	3月	県会議長に就任、9月 河内町長辞職
昭和18年(49歳)		広島県医師会会長となる 日本医師会理事となる
昭和26年(57歳)	1月23日	広島県知事に当選
昭和37年(68歳)	4月13日	知事辞任
昭和40年(71歳)	4月	勲2等瑞宝章を下賜
昭和41年(72歳)	1月11日	逝去

医師として自分自身重篤な症状に苦しみつつ、被爆者に対する犠牲的救護は県医師会の発行した「原爆日記」第I集・昭和45年3月、続いて「原爆日記」第II集・同年4月に掲載されている。これらの文中には多くの先輩が既に死没しておられ貴重な資料となっている。ただ、残念なことに発行部数が少なく、一般の市民や報道関係にあまり知られていないのが残念である。これまで概観したように、大原先生は県の政治面と医療面の代表者であるが、どちらかといえば県の政治面から、国会議員で活躍されていた。

たといわれ、被爆前後の活動は元広島市医師会長であった松坂義正先生がくわしく、財団法人広島原爆障害対策協議会が昭和36年に「広島原爆医療史」を発行し、この協議会(原対協と呼ばれる)の生みの親として、救護活動に凡てを捧げられていたし、具体的な詳細にわたる説明は松坂先生の方が詳しいとしなければならぬ。全体の印象評価からすれば、先生は性格的には温和で、よく知る人達からは慈父のような人間性をもっていたし、医師になっても政治活動と先生の天分は称えられねばならない。